

俺たちの村のことは 俺たちが決められる



▲「木の駅」の開会式に30数台の軽トラが集まっている（2012/10/8、愛知県東栄町）
◆土場で仲間と荷下ろしする伊藤さんたち（右から二人目）

思っていたらうまかった。これからも行く」「1ヶ月で3ヶ月分売れた。いつも来ないお客様が来てくれた。店を置もうと思っていてけどもうちよつと頑張る」「モリ券があると、心が贅沢になつてつい大買いでしまう」……。そんな声が各地で聞かれるようになつた。

「こんな日にはコタツに入つて、まだぬるいなあ」なんちや言つてスイッチを強に切り替えているのがオチさ」。愛知県東栄町の伊藤勝文さん（78歳）は、軽トラから荷下ろしながら昨年の自分を笑い飛ばす。伊藤さんたちのグループはこの日だけで軽トラ21台、約10tの材を木の駅に運んだ。

全国各地で木の駅プロジェクトが始まっている。「木の駅」は、不揃いの林地残材や間伐材を相場（1t20000～30000円）より少し高い価格（40000～60000円）で買い取り、大型スリパードなく地域の商店だけで使える地域通貨で支払う仕組み。「軽

トラとチエーンソーで晩酌」を合言葉に、あまり規格を気にせず農産物を道の駅に気軽に出荷するよう、気楽に山から木を出してお小遣いにして森と地域を元気にしているというのだ。その運営は木の駅実行委員会のように中学校区ほどの単位で住民により自主的に組織される。その中で財政運営からルールなどすべてが議論・決定され、発生する逆ザヤ（過払

い分）は寄付をはじめ助成金、森林環境税などで多様な手法で補填されている。

本誌2012年11月号で紹介されたように、木の駅は高知県仁淀川町での取り組みを原型に全国どこでも実施できるように標準化し、2009年岐阜県恵那市で始まりがちな山村の人間関係にいぶん風を通してくれる。山の人だけの集まりも商店だけの集まりも、

「どうすればここで木の駅を立ち上げられるか？」講演会などでいつも尋ねられる。「本気の地元山主3人とよそ者1人いれば始められます」。いつもそう答えることしている。そのよそ者は、固定しがちな山村の人間関係にいぶん風を通してくれる。山の人だけの集まりも商店だけの集まりも、



▲「木の駅」ののぼりが並ぶ
東栄町商店街

いつも暗く切ない話に終始する。しかし木の駅の会議では、それが化学反応を起こす。出荷のルール、地域通貨の扱い、大型店舗や町外資本店舗の選別などの議題を一つ一つ決めていく過程で何かが変わっていく。ひとり暮らしの高齢山主をどう支えるか、Iターン若者の参加方法は、商工会に入つてない商店はどうする、これ以上村のお店を減らさないためには、村の温泉を薪ボイラードに変えたら……。

議論の中で、山主が商店やよそ者の行く末を、商店主が山のありようを、よそ者が村の未来を、互

いに思いやり始める。そして、自治が始まる。俺たちの村のことは俺たちが決められるのだという実感が広がる。

◆

「森は海を、海は森を恋いながら悠久よりの 愛紡ぎゆく 熊谷龍子」

あの「森は海を、海が森を恋うように、森が海を、海が森を恋うように、日本の小さな山里で山とお店とよそ者が心を寄せ合う営みが始まっている。

そんな各地の木の駅で化学反応を起こしている人々の息遣いを本稿で紹介していきたい。（つづく）

まつた。その後2010年には鳥

取県智頭町、2011年愛知県豊

田市、岐阜県大垣市、高知県土佐

町・大川村・本山町、2012年

愛知県新城市、島根県吉賀町、茨

城県常陸大宮市、岡山県津山市、

愛知県東栄町、秋田県能代市、岐

阜郡上市、長野県辰野町などに

瞬く間に広がった。

丹羽健司

1953年奈良県生まれ。信州大

学卒業後、農業、農林水産省を経

て、現在、NPO法人地域再生機構

で木の駅アドバイザー。2005

年から市民参加型の森林調査「森

の健康診断」を愛知県で開始し、

2007年から「山里聞き書き塾」

2009年から木の駅プロジェクト

ト、2010年から「組手什」によ

る木育木装運動などを全国に普及し

ている。矢作川水系森林ボランティ

ア協議会代表、総務省地域再生マ

ネージャー

